

カール・ヤスパースの思想的・学問的軌跡

——ヤスパースの精神医学的哲学の解明のために——

梶 井 靖 之

I はじめに

カール・ヤスパース（Karl Jaspers, 1883-1969）は20世紀を代表する哲学者である。彼は20世紀前半から中頃まで、ハイデッガー（Martin Heidegger, 1889-1976）、サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-1980）、マルセル（Gabriel Marcel, 1889-1973）らとともに実存主義の時流にのって日本でも注目を集めた。しかし「実存思想の哲学者ヤスパース」というその強烈な印象が、かえって我々のヤスパース理解を歪めてしまっているのではないだろうか。

哲学者ヤスパースは、実存主義哲学の礎石を築いた実存主義哲学者の代表的人物であり、ヴェーバーの死をきっかけに精神医学から哲学へと転向し、その後キルケゴール、ニーチェ、ヴェーバーの影響下で実存思想的思索を重ね独自の実存哲学を構築したと一般には言われる¹⁾。確かに哲学に転じる以前の精神医学者ヤスパースは、精神病理学研究に現象学や解釈学を自分なりに応用して

1) 実際『岩波哲学思想辞典』では、ヤスパースは以下のように説明される。ヤスパースは、「……精神医学にフッサールの現象学とディルタイの解釈学の方法を導入して、精神病を心身関係の総合的観点で論じた『精神病理学総論』（1913年）を著し注目を浴びる。次いで心理学の教授資格を取得、私講師として心理学の講義を始める。人間の生き方に関わる世界観の諸類型を考察した『世界観の心理学』（1919年）を刊行後、20年にウェーバーの死に際して、ウェーバーこそ世界観形成に基盤を与える真の哲学者と考えたヤスパースは、講壇哲学にとどまるリッカートと対立し、哲学を志す。21年同大学の哲学員外教授、22年哲学正教授となる。24年からキルケゴール、ニーチェ、ウェーバーの影響のもとに8年にわたる思索を重ね、『現代の精神的状況』（1931年）と前期の主著『哲学』3巻（1932年）とを公刊。……〈実存哲学〉の立場を体系化して、現代の実存主義哲学の礎石を築いた。……」柏原啓一「ヤスパース」（廣松渉他編『哲学・思想事典』岩波書店，1998年）1606-1607ページ。

もいる。しかしそれらは、哲学へと転じた後の実存思想とは全く意図も内容も異なる故に、その後の実存思想とは全く切り離されて考えられてしまう。こうして精神科医ヤスパースがカウンセリングで得た成果や、精神医学者ヤスパースが脳のメカニズムについて研究した内容、さらには精神病理学者ヤスパースの著作については、実存思想に目覚める以前、哲学研究以前の全く別分野、精神医学での研究業績と見なされるのである。したがって哲学者ヤスパースに対する大方の印象と言えば、キルケゴール、ニーチェ、ヴェーバーの影響下にある実存について思索に耽る哲学者の姿であり、国民の熱狂的支持下にあるナチズムに自殺を覚悟して抵抗する勇敢不屈のヒューマニストの姿に尽きよう。

以上のヤスパース理解に立つならば、ヤスパースにある精神医学上の経歴は、当然哲学者ヤスパースを理解する上では不必要なものとして見過ごされるか、あるいはただ無関心に眺められるにとどまる。

さらにそのようなヤスパース理解は、日本のヤスパース研究者においてもさほど変わらない。つまり、実存哲学という観点から哲学者時代のヤスパースの著作に対してのみ読み込みや分析解釈が行われ、精神医学者時代も含めてヤスパース哲学を理解しようとする動きはなかった。最近『カントとヤスパース』を著した伴博の場合も同様である。すなわち伴は、ヤスパースの哲学的発展を初期、中期、後期と三つの時期に分ける。その初期について伴は、「彼の思想発展の全体からみれば、広義の模索期といえよう。これには次の二段階が考えられる」²⁾ と言い、精神病理学の時期と心理学の時期とに分ける。精神病理学の時期とは、「ハイデルベルク大学精神科クリニックの助手となって翌年に出された学位論文『郷愁と犯罪』(1909年)に始まり、この時期の代表作『精神病理学総論』(初版、1913年)に至る時期にあたる。いわば哲学以前の段階とされよう」³⁾ と言う。つまり伴博は、精神病理学の時期、精神医学の時期を哲学的発展の初期にあたり、思想発展全体からみれば広義の模索期であると指摘

2) 伴博『カントとヤスパース』北樹出版、1999年、599ページ。

3) 同上書、599ページ。

しつつも、そこにヤスパースに独自の重要な哲学的端緒を見出すことはできず、「いわば哲学以前の段階」であると言うのである。このように、ヤスパースの精神医学の時期⁴⁾は哲学以前の段階とされ、ヤスパース哲学研究においては概ね切り捨てられ無視されてきたのである。

つまりヤスパースは、これまで精神医学と哲学という二つの全く異なる専門領域で成功を収めた二つの顔を持つ人物であるかのように捉えられてきた。精神医学者はその後の彼の優れた哲学的展開には深くふれることはなく、さらにはまた哲学者も彼にある哲学以前の優れた精神医学に深くはふれてこなかったのである。

しかしここで強調したい点は、ヤスパースにおいては実存思想という思想的潮流の担い手としてのイメージだけが先行し、精神医学者としての過去はそれとは無関係で別個なものとして無視されたり、単なる模索期として軽視され見過ごされてしまって良いのかという点である。精神医学も医学の例にもれることなく自然科学である以上、基本的に人間を物理学、化学、数学という観点から自然科学的に「もの」として捉える学問である。したがって、学生時代から医学を専攻し精神医学研究に専念していた若きヤスパースにあっては、そのような機械論的医学の視点からひたすら人間を「もの」として捉える人間研究がなされてきたはずである。同じ人間研究ではあっても、確かにそのような科学的研究の中に、やがては実存哲学へと発展するような重要な哲学的思索が介在していたとは考えもつかない。ここにヤスパースが著名な哲学者となる以前の精神医学者時代が、哲学以前として軽視され見逃される一因がある。しかし精神医学から哲学への転身こそが、良くも悪くも実存哲学者ヤスパースの特徴で

4) なお私は、前期ヤスパースを精神病理学者としてではなくあくまで第一義的にという意味で精神医学者として捉えたい。確かにヤスパースは精神病理学者として大きな業績を上げた。しかしそれは、これから考察するヤスパースの歩みからも分かるように、ヤスパースがなによりもまずはハイデルベルク大学精神科クリニックにあって臨床の現場に立つ医師、精神科医であると同時にそこで精神医学を研究する医学者、精神医学者であったからである。そのヤスパースの歩み全体における精神医学という出発点を際立たせるために、前期ヤスパースを精神医学者として考えたいのである。

ある。まさにヤスパーズにおいては、「はじめに精神医学ありき」なのである。

ヤスパーズ哲学に対しては、人間学に近い凡庸さ、現象学ほどの学的な深みのなさ、安易な宗教性といった批判ができる。しかし、実存主義への社会の熱も冷め、哲学者ヤスパーズへの注目も納まった今日であればこそ、早断を控え、ヤスパーズのもう一つの顔、哲学者となる前の精神医学者としてのヤスパーズを看過せずに考察し、精神医学者と哲学者という二つの顔を重ね合わせる試みも有益であろう。この一見全く違う二つの顔のつながりを明らかにして一つに結び合わせることができれば、より透明なヤスパーズ像を描いてみせることができるからである。つまりは精神医学者ヤスパーズはどのような研究成果を上げ、なぜそこから哲学へと転じ実存哲学を構築するにいたったのか、またヤスパーズにおける精神医学研究とその後の哲学研究とには何らかのつながりが存在するのかを追究し、またさらにそう言うことが可能ならば、精神医学研究の中にどのような哲学的要素が存在するのか、時代背景や学制的状況、特に科学史的観点や思想史的文脈を読み解きつつ前期ヤスパーズにその答えを求めたいのである。そこからヤスパーズの哲学全体を見わたす正確なパースペクティブと彼独自の哲学への深い示唆が獲得されるのではないか。精神医学研究から実存哲学構築へといたるヤスパーズの歩み全体を視野に入れる時、時代が要請した、二十世紀を代表する哲学者の真理への道のりがさらに鮮明に浮び上がってくるように思われる。したがって本稿では、まずヤスパーズの精神医学者時代を哲学者ヤスパーズの前期として位置づけ、彼の自伝、『哲学的自伝』(*Philosophische Autobiographie*, 1977)と『哲学への道』(*Mein Weg zur Philosophie*, 1951)、そして彼の哲学へといたる経緯を分析したハンス・ザーナー著『ヤスパーズ』(*Jaspers*, 1970)を参照にしつつヤスパーズの思想的転換の軌跡を明らかにする。またそこからの真のヤスパーズ像についてのさらなる解明は次稿以降にゆだねられよう。

I 精神医学研究へといたる学生時代 (1902年～1909年)

ヤスパース自身、「大学での私の経歴はきわめて異常であって、親切な天使が私のためになるように働いたのだといわれるほどであった」⁵⁾と言う。そのようなヤスパースの経歴について、まずは学生時代から考察し、さらにその後の思想発展の時期を前期・中期・後期という三つの時期に区分して考察したい。そこからこそ、精神医学研究時代である前期ヤスパースにおいてすでに積極的に哲学研究がなされていたこと、また哲学研究時代である中期、後期ヤスパースにおいてもさらなる精神医学研究が継続されていたことが明らかになろう。

ヤスパースは、子どもの頃からはっきりとした病名も治療法もわからない難病を患いしばしば高熱に悩まされていた。正確な病名は、18歳になって気管支拡張症と二次的心不全 (Bronchiektasen und sekundaere Herzinsuffizienz) という難病であることが初めて分かった。しかも当時のその疾患についての論文の記述には、「遅くとも30歳代には全身化膿ができて死ぬ」とあり、それ以来、孤独と憂鬱がヤスパースにつきまとうこととなった。その希望なき闘病生活では、当然一般人と同様の生活は叶わない。彼はまさに全生活を治療の制約下に置かねばならないほど深刻な難病を患っていたのである⁶⁾。「あらゆる肉体的な無理、同時に正常な生活を放棄し、毎時少量ずつ、および1日2、3回大量(約40ccまで)ずつ、痰を規則正しく吐き出すこと」が必要であった。それが中断されるやただちに、発熱、全身の震え、咯血、急性肺炎患に襲われたのである⁷⁾。

そのような病弱な肉体を抱えつつも17歳の時ヤスパースは、スピノザに出会

5) Karl Jaspers, *Schicksal und Wille*, Muenchen, R. Piper & Co. Verlag, 1967, S. 26. (林田新二訳『運命と意志』以文社, 1972年, 27-28ページ)。以下, SW と略記。

6) Karl Jaspers, (Serie Piper 150) *Philosophische Autobiographie*, 2. Aufl., Muenchen, R. Piper & Co. Verlag, 1977, 1984, S. 12. f. (重田英世訳『(ヤスパース選集14) 哲学的自伝』理想社, 1965年, 11ページ)。以下, PA と略記。

7) Hans Saner, *Jaspers*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch, 1970, S. 17. f. (重田英世訳『ヤスパース』理想社, 1973年, 20ページ)。以下, J と略記。

い世界全体を初めて哲学的に自覚するにいたる⁸⁾。その後大学において彼は、最初の3学期間法学を専攻とし学ぶが、法学にある「……社会生活に関する抽象的概念操作に幻滅を感じ」⁹⁾て、1902年に専攻を医学へと変更してしまう。法学的に抽象的な概念で人間を理解するだけでは飽き足らず医学へと転じたということは、今ここに生きている具体的な人間を直接科学的に理解したいという情熱がヤスパースを突き動かしたということである。しかもそこには、難病を抱えながらも若きヤスパースなりの積極的な人生設計がうかがわれる。1902年に両親に宛てた手紙の中でヤスパースはこう述べている。「規定の学期数を修了したあと医師国家試験を受けます。そのときになってみて、やはり今と同様やれる自信があれば、私は精神医学と心理学へと進みます。そうなると私はさしずめ精神病院の医師ということになるでしょう。」¹⁰⁾そして能力に左右されるので確実ではないがと前置きしつつも、「おそらくゆくゆくは心理学者として、たとえばハイデルベルクのクレベリンのように、学究の道を選ぶでしょう」¹¹⁾と将来の目標を語った。

ヤスパースは念願通りに、1905年医師予備試験合格、1907～1908年医師国家試験合格、1909年医師開業資格も取得して医師の資格を得た。また1908～1909年の半年の間、ハイデルベルク大学内科クリニック神経系疾患部門で研修も行った¹²⁾。そして臨床経験を生かし1909年、論文「郷愁と犯罪」¹³⁾ („Heimweh und Verbrechen“, 1909) を完成させ医学博士の学位を授与される。

以上のようにヤスパースの関心は、法学における抽象的な人間の行動規定か

8) Karl Jaspers, *Rechenschaft und Ausblick*, Muenchen, R. Piper & Co. Verlag, 1951, S. 324. (草薙正夫他訳『哲学への私の道』以文社, 1980年, 8ページ)。以下, RuA と略記。

9) PA, S. 10. 邦訳7ページ。

10) Ebenda, S. 11. 邦訳9ページ。

11) Ebenda, S. 11. 邦訳9ページ。

12) Ebenda, S. 17. 邦訳19ページ。

13) Jaspers, „Heimweh und Verbrechen“ in *Gesammelte Schriften zur Psychopathologie*, Heidelberg, Springer-Verlag OHG., 1963. 邦訳では、この論文のタイトルは「郷愁と犯罪」ではなく、以下のように「懐郷と犯罪」と訳されてヤスパースの精神医学論文集『精神病理学研究』の中に収められている。ヤスパース「懐郷と犯罪」藤森英之訳『精神病理学研究Ⅰ』みすず書房, 1969年。

ら医学における具体的な人間の身体理解へと移るのであるが、その具体的な人間理解への情熱の背景には哲学的思索が少なからず介在していたと予想されよう。「スピノザを読んで以来、たしかに私は哲学的洞察をもたらしはするが、まさしくそのゆえに科学的には通用しなかったある方法で、私はものを考えた」¹⁴⁾とヤスパース自身語っている。しかしここまでの彼の経歴をみる限り、哲学好きの単なる医学博士にとどまる。特にヤスパースは、学生として正規に教授の指導下で哲学の研究に従事したことはなかった¹⁵⁾。個人的には興味をもって哲学を探究していたとしても、当時のアカデミックな哲学の展開を深く理解していたとは思えないのである。専門外である哲学に関する広範な学術的知識や当時盛んであった現象学などの哲学的展開について指導を受けながら研究するといった機会もなかった。当時ヤスパースは、哲学博士ではなく、自らの人生設計通りにあくまで医学博士となったのである。

II 前期ヤスパース《精神医学研究時代》(1909年～1913年)

医学博士となったヤスパースは、前述のように難病を患い、定期的な会議、研究会などへの出席さえままならぬ身でありながらも、ハイデルベルク大学精神科クリニック（ハイデルベルク大学精神医学教室）主任教授ニッスル（Franz Nissl, 1860-1919）にその精神科医、精神医学者としての才能を認められ、1909年に無給助手に任命された。ニッスルのこの特別の配慮によりヤスパースは、精神科医また精神医学者として当時の精神医学界を世界的にリードする同大学精神科クリニックにて、精神疾患の治療の現場に臨み精神医学研究に励む機会を手に入れた。精神医学研究への道が開かれたヤスパースは、精神科医、精神医学者としてさらなる成長を遂げるのであるが、成長はなにも専門内だけにとどまるものではなかった。

ヤスパースは、ハイデルベルク大学精神科クリニックの臨床の現場に立つか

14) PA, S. 36. 邦訳50ページ。

15) J, S. 31. 邦訳36ページ。

たわら、自らの精神医学上、人間への理解を深めるためにディルタイの「記述的分析心理学」やフッサールの前期「現象学」への理解が必要となり独学でそれらを学ぶようになった¹⁶⁾。ヤスパースは1909年フッサールの著作を初めて読み研究し始めた¹⁷⁾。哲学への関心は単なる独学にとどまらず、さらにはラスク (Emil Lask, 1875-1915) のカント・ゼミナールやヴィンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848-1915) の講義を聴講する力の入れようとなった¹⁸⁾。ヤスパースはその当時の自らの哲学研究について、「妻は早くから、私にプラトンを指摘しておりました。しかし私はプラトンをまだ知りませんでした。時間と体力が許す限り、私は当時の精神医学的研究のかたわら、たまたま開かれていたラスクのゼミナールでカントを読みました。私はカントの理念論を理解しました。アリストテレス、デカルトも若干研究されました」¹⁹⁾と言っている。

また1909年にヤスパースは、医師仲間グルーレが催した会合においてマックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) と知り合う²⁰⁾。ヤスパースが将来の進路も左右するこの運命的出会いを果たしたのには、何よりもヤスパースが単なる医学者にとどまりきらない、広い学際性に満ちた医学者だったからであろう。このようにしてヤスパースは、医師の資格を得て臨床の現場に立ち、また医学博士として精神医学研究を進める一方で、人間への理解をさらに深めるために過去の偉大な哲学者や同時代の哲学者から多くを学び取り、時には哲学関係の講義を直接受講しながら独自に哲学的思索を深めていった。医師であり精神医学者であるヤスパースは、精神疾患を持つ患者への実際の臨床経験の中で、精神医学において、またその専門の枠を超えても、いかにして患者ひいては人間は学的に理解されうるのかという独自のテーマを抱き、専門外の哲学的思索にまで没頭し独自の精神病理学構築へと集中していったのである。

16) PA, S. 23. 邦訳29ページ。

17) J, S. 32. 邦訳38ページ。

18) 重田英世『人類の知的遺産71 ヤスパース』講談社、1982年、151ページ。

19) PA, S. 125. 邦訳164ページ。

20) J, S. 33. 邦訳39ページ。

つまりヤスパースは、一精神医学者としてどのようにして人間理解に応用すべきかを試行錯誤しその中で独自に練り上げた哲学的思索の成果を、一医師として治療に活かすにとどまらず独自の精神病理学の構築に活かした。彼は1913年、前期ヤスパースの代表的著作『精神病理学原論』(*Allgemeine Psychopathologie*)²¹⁾にその成果を具体的に結実させた。この書は、ヤスパースが1909年以降すでに博士論文「郷愁と犯罪」をはじめ様々な優秀な論文を発表していたことから、1911年にヴィルマンズと出版業者フェルディナント・シュブリンガーより精神病理学の教科書執筆を依頼され²²⁾刊行が実現するにいたったものである。ではその精神医学時代の主著に対する評価は果たしてどのようなものであったのだろうか。

この『精神病理学原論』は、「学生、医師、心理学者のために」という控えめなサブタイトルが示す通り、精神医学の基礎学である精神病理学の入門書であった。がそのサブタイトルとは裏腹に当時の精神医学界から尋常ではない評価を受けた。まずハイデルベルク大学精神科クリニック主任教授ニッスルは、ヤスパースから出版間近の校正刷を見せられた三週間後に彼を自宅に招き、その書を高く評価し、大学教授資格を与えたいがハイデルベルク大学には今のところ欠員がないこと、そのかわりミュンヘン大学のクレペリン、ブレスラウ大学のアルツハイマー (Alois Alzheimer, 1864-1915) らが教授資格を与える用意があると打診してきていることをヤスパースに伝えた²³⁾。またハンス・ザーナーによれば、この本を評して当時フライブルク大学の医長であった「オスワ

21) ヤスパース『精神病理学原論』(*Allgemeine Psychopathologie*, ersten Auflage, Berlin, Julius Springer) が1913年に出版される。その後、何度も書き加えられ、第9版まで出版されることとなる。日本語訳においては、初版本が『精神病理学原論』、第7版が『精神病理学総論』とタイトルをかえて出版されている。本論文では、初版を『精神病理学原論』とした。また第二版以降については、『精神病理学原論』のあとに括弧で第何版かを明記した。第4版において大きく書き加えられた(ヤスパース、前田利男・上村忠雄訳「訳者あとがき」『世界観の心理学(下)』理想社、1971年、515ページ参照)ようであるが、版が重ねられるとともに、その内容がどのように変化していったかについては今は立ち入らない。

22) PA, S. 22-23. 邦訳28ページ。

23) Ebenda, S. 29. 邦訳38-39ページ。

ルト・ブームケは、……きわめて非凡な一冊の本、これがみずからと著者のために、一挙にして、われわれの学問の歴史の中に、持続的な場所を獲得した。……哲学的な修練ととくに概念的な明晰性が、事実的なものに対するゆるぎない尊敬ならびに、あらゆる思弁の根本的な否認と、一緒になっている」と論評し、「クルト・シュナイダー、ルートヴィッヒ・ビンスワンガー、ガウプを含む第一級の学者たちは、しばしばなお数十年後でさえ、このような評価を繰り返した。」²⁴⁾

確かにビンスワンガー (Ludwig Binswanger, 1881-1966) は、ヤスパースについて、「彼は方法的論議を私たちの領域に導入した最初の人物である以上、私たちは精神医学の方法論的問題をとりあつかう場合にはいつでもふかい感謝の念をもってヤスパースを思い浮かべないわけにいかないのです……強調しておきたいのは、彼の見解をそのように批判し形成しなおすからといって精神医学への彼の功績がけっしてせばめられてはならないし、またそんなことはできませんということ。事情はまさに反対なのです！」²⁵⁾と言っている。それほどのこの書は、当時衝撃的であり高評価を得ていた。またヤスパースによれば、1913年ゲッティンゲンに滞在した際にフッサールの自宅に招かれ、そこでフッサールに弟子として扱われた。当時この書をフッサールが読んでいたかどうかは定かではないが、すでに錯覚と妄想体験について二、三の現象学的論文を発表していたヤスパースに対しフッサールは、「あなたは、あなたの論文において立派に現象学を駆使しています。あなたがすでに現象学を正しく実行しているかぎり、あなたは現象学とは何ぞやということを知る必要はないのです。あなたはそれを続けていけばよいのです」²⁶⁾と言ったという。

日本においても、精神医学者ヤスパースとその代表的著作『精神病理学原

24) J, S. 30. 邦訳35ページ。

25) L・ビンスワンガー、荻野恒一他訳『現象学的人間学』みすず書房、1967年、68-69ページ。
(Ludwig Binswanger, *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Band I Zur Phänomenologischen Anthropologie*, Bern, Francke, 1947.)

26) RuA, S. 328. 邦訳14ページ。

論』への高い評価は今なお消えることはない。ヤスパースの『精神病理学原論』は、精神病理学の分野においては必須の古典である。河合隼雄は以下の言う。「精神病理学とは、……無論、臨床心理学の関与する重要な領域であり、なにかんずく、精神病理学の、ヤスパース (Jaspers, K.) に始まる古典的なものから、……アンリー・エー (Ey, H.) などに代表されるフランス語圏における仕事は無視できない」と²⁷⁾。また濱田秀伯も、ヤスパースが臨床に携わった期間が約10年間だったことにふれ、「少しずつ真実に近付こうとする気の遠くなるような精神病理学の仕事は、Jaspers, K. の天才をもってしても10年間では短かすぎると思います。逆にいえば、僅か10年間であれだけの体系を築き上げた着眼の確かさと力量の大きさに、感嘆するほかはない」²⁸⁾と言う。さらに森山公夫も「精神分裂病」の歴史を考察する際には、大衆社会時代を「四人の精神科医で代表させ、1960年代末以降の転換を『DSM-III』で代表させることにします」²⁹⁾と言っているが、森山があげる四人の精神科医とは、まさにクレペリン、プロイラー、ヤスパース、クルト・シュナイダーである。ヤスパースは、クレペリンの後に現れた精神医学における若き星なのであった。精神医学研究と臨床においてヤスパースは、精神病理学研究に集中し『精神病理学原論』を著すことによって、日本の精神医学研究においてもこのように今なお無視できないほど優れた足跡を残しているのである。

以上のようなドイツと日本における評価をみても、この書によってヤスパースがいかに精神医学界において一躍脚光を浴び、注目されてきたかが分かる。それまでは病弱なハイデルベルク大学精神科クリニックの無給助手でしかなかったヤスパースが、この著作により一転して様々な大学から教員として招聘されるまでにいたったのである。

27) 河合隼雄監修，山中康裕他編『臨床心理学① 原論・理論』創元社，1995年，266-267ページ。

28) 濱田秀伯『精神病理学臨床講義』弘文堂，2002年，149ページ。ここで濱田秀伯が、慶應義塾大学医学部精神神経科専任講師として純粋に医学研究の立場から精神医学者ヤスパースを高く評価していることは注目に値する。

29) 森山公夫『統合失調症』ちくま新書，2002年，72-79ページ。

哲学者ヤスパースはそれ以前に実は20世紀を代表する精神医学者という過去をもつ。20世紀を代表する哲学者の面にのみ集中してきたヤスパース哲学研究者にとって、以上のような精神医学上の業績は、無視し難いものではないだろうか。

III 前期ヤスパース《心理学研究時代》(1914年～1919年)

看過できないことは、精神医学者ヤスパースが1913年『精神病理学原論』出版後、以上のように精神医学界での一躍高い評価と招聘を受けながらもその地位を捨てて心理学者への道を選んだということである。確かにヤスパースは、前述のとおり学生時代に、法学部から医学部へと転部し、ゆくゆくは心理学者として研究の道を選びたいと述べてもいた。がヤスパースはそのような希望自体、その時すでに忘れていた³⁰⁾。であればなおのこと著書『精神病理学原論』をきっかけに、精神病理学者として著名となり他大学での教授への道が用意された以上、それに応じて精神病理学研究を深める方が自然であっただろう。しかしヤスパースはそれに応じなかった。では一体なぜ彼は精神医学研究者への道を捨て、心理学講師になったのであろうか。またさらにそこから逸脱して哲学者への道へと突き進んでいったのはなぜであろうか。

その理由は、他大学へ移るかどうかなッスルに聞かれた際のヤスパースの次の返答に言い表されている。「ハイデルベルクは私にとってたいへん切実なところですから、ここにとどまって待つ方を選びます。しかもおそらく、私は哲学部で心理学の教授資格をとることができるでしょう。われわれはそこにいわばコロニーを置くのですね。そうするとあとで私はクリニックへ戻ることができます。』³¹⁾ ヤスパース自身がハイデルベルク大学精神科クリニックにて引き続いて研究する道を切に望んだのである。同大学の精神科クリニックでの研究を継続するための策として、1913年12月ヤスパースは同大学哲学部の心理学の教

30) PA, S. 29. 邦訳39ページ。

31) Ebenda, S. 29. 邦訳39ページ。

授資格を取得し、1914年から心理学の講師、1916年から1920年まで心理學員外教授という歩みを進めるのである。同大学で心理学の教鞭を執ることは、ヤスパースにとってそこから離れることなく精神医学研究を続け、ゆくゆくは同大学精神科クリニックへと戻るための策であった。

当時のヤスパースにとって最も切実な問題であったのは、自身の抱える難病、気管支拡張症と二次的心不全 (Bronchiektasen und sekundaere Herzinsuffizienz) である。前述の通り、ヤスパースが18歳当時に読んだ疾患の説明には、「遅くとも30歳代には全身化膿ができて死ぬ」とあった。そしてヤスパースは丁度『精神病理学原論』を世に送り出した年に、その年齢に達した訳であるから、いくら医学が十数年の間に進歩しようともその最悪の結果から全く自由になることはできなかったであろう。後で考察するようにヤスパースは、ニッスルの後任もこの難病を理由に断念せざるを得なかった。これまでのヤスパースの精神医学上の臨床や研究、さらにはその中から生み出された素晴らしい業績は、同大学精神科クリニックにある主任教授ニッスルと同僚らの深刻な難病を抱えたヤスパースへの配慮なくしては不可能であった。自らの難病悪化が懸念される30代となったヤスパースが、ニッスルの下にとどまることを切に欲したのは、闘病と自らの研究とを両立させるための当然の策であったのだ。

しかし医学博士が哲学部で教授資格を取ることは、我々の通常では考えられないことである。なぜ精神医学者ヤスパースが心理学の教鞭を執りえたのか。それは、その当時精神医学者ヤスパースが心理学においても業績を上げており、また同大学哲学部に心理学のポストが空いたからというだけでは説明がつかない。したがってヤスパースにめぐってきたその幸運については、当時のハイデルベルク大学を取り巻く学的状況やヤスパースを支持する研究者の存在、さらには同大学の教授資格取得規定を理解しなければならない。ハイデルベルク大学では心理学はそれまで教えられてはいなかった。しかもザーナーによれば、「西南学派の意味で、哲学と心理学とは相互に厳密に分離することが望まれていたから、学部は、このような場合に教授資格を一医学者に授与する用意が

あった」³²⁾と言う³³⁾。そしてそこに目をつけたニッスルが、ヴェーバーとともに心理学者として一医学者ヤスパースを哲学部へ投入することに尽力したのである³⁴⁾。ヤスパースは、時折聴講していた哲学部教授ヴィンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848-1915) のもとで心理学の教授資格請求者として受け入れられ、教授資格請求論文「精神病理学原論」に対する鑑定書をニッスル、ヴェーバー、ミュンヘンのオスヴァルト・キュルペ (Oswald Kuelpe) らに書いてもらうことによって1913年12月教授資格を授与されたのである³⁵⁾。

しかしこのような最初で最後の特例が可能となったのは、ニッスルらによる理解と尽力もさることながら、当時のハイデルベルク大学の教授資格取得規定にそれに対する禁止条項がまだ盛り込まれていなかったことが何よりも大きかった。つまりそこには、他分野において博士号を有する者が博士号を有さない分野において教授資格取得の申請をすることに関してなら禁止する項目がなかったのである³⁶⁾。以上の幸運も手伝って、ヤスパースは1914年から同大学

32) J, S. 35. 邦訳41ページ。

33) その当時の経緯をヤスパースは次の様に語っている。「1913年のハイデルベルク大学哲学部では、心理学が擁護されねばならない、心理学は時勢にかなったものであるからもはや心理学なしですますことはできない、とする意見が支配していた。しかし当時のハイデルベルクでは、ヴィンデルバントとリッケルトとの、いわゆる西南ドイツ学派が重きをなしていた。彼らは哲学と心理学とは相互間に何らの関連をもたないと考えていた。したがって哲学の講座に心理学者を呼ぶことはできないと考えられた。心理学のための講座がなかったのである。心理学を教えるためにはどのようにしたらよいかが問題であった。いろんな考慮がなされていた時、次の事実が判明した。それは『精神病理学総論』を著わした精神病理学者がハイデルベルクにいて、その人はこの著書によって尊敬をうけている、その人の分野は現実主義的で経験的な純粋の心理学であり、心理学者として哲学部の教授資格を得たいと思っているらしい、ということであった。(M・ウェーバーが仲介者であったが) 私が哲学部に入った時、哲学部のみんなは、自分たちの窮状から脱することができ、ただの私講師でもって心理学を擁護するという要請を充たすことができたことに、満足していた」(SW, S. 26. 邦訳28ページ。)と。

34) PA, S. 29. 邦訳39ページ。

35) J, S. 35. 邦訳41ページ。

36) つまりは、ヤスパースによれば、ハイデルベルク大学の哲学部の学部長カール・ノイマンはヤスパースに対して「『医学博士さんですか。この哲学部で教授資格が取りたいのですか。非常にむずかしいことでしょうね』と友好的に言った。私はポケットから教授資格取得規定をとり出して、『部長先生、ここには博士号をもっていることが要求されていますが、哲学博士号が要求されているわけではありません』というと、『それは奇妙なことですね』と答えた。ノイマンは、官職関係の専門知識に精通している事務官である老シュヴァルツ氏を呼んで『シュヴァルツ君、これはどういうことかね』とたずねた。『こんなことははじめてです』というのが答えであり、ノ

哲学部の心理学教員となり、希望通り同大学にとどまることができたのである。しかもヤスパースは、研究分野を決して精神医学から完全に心理学へと転じたのではない。心理学といっても精神医学の性格が強いものであったに違いないのである。というのは心理学の教授資格をハイデルベルク大学にて取得できたのは、前述のように当時の同大学に心理学の教授資格を一医学者に授与する用意があったからである。今日のように心理学という独自の学問領域がはっきりとは確立していなかった20世紀初頭においては、心理学は今日以上に科学的立場に立つ医学の領域でもあった。ヤスパースは、科学者として、精神科医、精神医学者としてなによりもまず認められ、そこからさらに心理学の教授資格を取得する。それは精神科医、精神医学者ヤスパースが、その研究の一環として遂行する心理学研究なのであった。

このようにしてヤスパースは、精神医学者として大成したものの同大学精神科クリニックへいずれは戻ることを念頭におき、同じ学内でニッスルらの支持、支援を受けつつ心理学者の道を歩み出した。だからこそヤスパースは、1914年から心理学の講義を担当しながらも、なおもその一方で精神科クリニックでの無給助手を辞めることなく1915年まで続けたのである。またヤスパースは、心理学講師として心理学の講義を「悲しいかな、臨床拔きの講義でおこなった」³⁷⁾と嘆いている。そればかりかとうとうヤスパースは、その現状に我慢できず、心理学の講義において臨床を行うことができるようにハイデルベルク大学に対し心理学研究施設の設置を要請する。結局その許可は下りなかったのだが、ここにも臨床に慣れ親み臨床にこだわる精神科医、精神医学者ヤスパースらしさが表されていよう。しかもその要請に協力したのは、精神科クリニック

、さらに私に対して、『あなたに正教授になる資格があるかどうか検討しなければなりません。決定は後でお知らせします』と言った。二・三日後に哲学部は、教授資格取得規定を根拠として私が教授資格をもちうると決定した。／医学博士が哲学部で教授資格を得ることができたのは、私の場合が最後であった。ナチスが資格取得規定を変更したので、不可能になったのである。今ではどの学部でも、その学部の博士を用いることになった。博士は大学の博士であって普遍的な妥当性をもっているという、古くから伝承された考え方は忘れられてしまった。私が一番最後の場合であったが、それが有効であった」(SW, S. 27-28. 邦訳30-31ページ。)という。

37) PA, S. 29-30. 邦訳39ページ。

の同僚グルーレであった。ここにおいてもヤスパースと、ハイデルベルク大学精神科クリニックとの今なお続く深いつながりが伺える。

またこの頃ヤスパースは、学部長ゴットリーブ教授から同大学精神科クリニック主任教授ニッスルの後任にならないかともちかけられる。それはヤスパースにとって、研究面でも医療面でもさらなる発展が望める願ってもない転機であった。にもかかわらず結局彼は、難病を抱えもつことから辞退せざるを得ないと苦渋の選択を自ら下すこととなった³⁸⁾。

このようにして、当時ハイデルベルク大学で員外教授として心理学を教えていたヤスパースにとって、同大学に心理学研究施設を新たに設立してそこで心理学の臨床に専念するという希望が大学側によって絶たれ、また何ものにも替えがたい研究及び臨床の環境を与えてくれたハイデルベルク大学精神科クリニックの主任教授ニッスルが退任することとなり、しかもその後任にというチャンスも自らの難病故に活かすことができなかったことは、心理学者としても精神医学者としても臨床を重要視し、将来的には精神科クリニックで研究しようと考えていたヤスパースにとって致命的な事態であったに違いない。しかしそのような研究上の危機が、新たな可能性を開くこととなった。

すなわちヤスパースは、1919年『世界観の心理学』(*Psychologie der Weltanschauungen*)を出版したが、そこにある哲学的要素が大いに評価されたのである。そこには1914年から始められたキルケゴール研究によるヤスパースの実存哲学的展開の始まりが見てとれる³⁹⁾。ザーナーが言うように、その当時はまさに「依然として心理学として自己を思い違いしている一つの新しい哲学が、名乗りをあげたかのように、人びとは感じた」⁴⁰⁾のである。

38) Ebenda, S. 30. 邦訳40ページ。

39) Karl Jaspers, (Serie Piper 1988) *Psychologie der Weltanschauungen*, Muenchen, R. Piper & Co. Verlag, 1971, S. X. (上村忠雄他訳『世界観の心理学〔上巻〕』『第四版への序文』理想社, 1971年, 11ページ)。以下, PdW と略記。

40) Ebenda, S. 36. 邦訳43ページ。

IV 中期ヤスパース (1920年～1932年)

——哲学的「人間存在探求」の方法論的模索の中期時代——

前期においてヤスパースは、精神科医、精神医学研究の中で精神病理学的成果を上げ、さらには心理学研究においても1919年に『世界観の心理学』を出版し哲学的成果をも上げ、研究者としてその名を広めた。しかし闘病生活の中で様々な制約を受けざるを得ないヤスパースにとっては、今なお精神医学研究の環境を整えることは困難であった。しかもその一方では、1920年ヤスパース自身が真の哲学者として尊敬していたヴェーバーが他界し、哲学の真髄を自ら教えなければならないという新たな使命感が自覚され始める。1920年に、フライブルクにフッサール、ハイデッガーを訪ねたこと⁴¹⁾もその哲学への使命感が原因であろう。このようにしてヤスパースは、自らが思い描く精神医学研究への道が次第に困難さを呈し始める一方で、『世界観の心理学』を著すことにおいて哲学的成果を上げ、またヴェーバー死後自らの研究を使命としての哲学へと一気に向けることとなった。もちろんこの転身もヤスパース自らの闘病生活への配慮の結果でもあった。

1920年ハイデルベルク大学哲学教授ハンス・ドリーシュがケルン大学の招聘に応じた時、ヤスパースは哲学への転向を決意し、おりしもその著作『世界観の心理学』に対する高評価から1918年以来哲学正教授であったハインリッヒ・マイアーの同意の下で、1920年4月1日ハイデルベルク大学哲学部の定員上の哲学助教授になった⁴²⁾。他方、1921年グライフスワルト大学とキール大学から

41) PA, S. 92. (草薮正夫他訳『哲学への私の道』以文社, 1980年, 180ページ)。

42) その詳細をヤスパースは次に様に語っている。すなわち「さて事態は次のように進展した。私は心理学を、最初は、多くの図や曲線や極めて興味ある表を使った純粹に経験——生理学的な心理学を講義したが、後さらに世界観の心理学にまで手を広げた。世界観の心理学という問題はもう心理学としては疑問のあることであった。1921年に、ハイデルベルクの哲学の員外教授職をもっていたドリーシュ (1867-1941年) がケルンに呼ばれて行った。私は、1919年に出版した著書『世界観の心理学』を持って、リッケルトの同僚であり、当時心理学と哲学との分離を認めない著名な哲学者であったハインリッヒ・マイヤー正教授 (1867-1933年) のところに行って、『先生、私の著書を持って参りました。私の教授資格を哲学にまで拡大することができないかどうか検討して下さい』とノ

も哲学の教員として招聘があった。しかしヤスパースは、ここでも「精神的にきわめて活気に溢れ、私たちにはいろいろな憶い出ゆえに貴重な、かけ替えのないハイデルベルクにとどまりたい」⁴³⁾と考え、それらの招聘を断る。そして1921年ハイデルベルク大学哲学部の定員外正教授となり、さらには同大学哲学教授ハインリッヒ・マイヤーがベルリンに転じた際に、晴れて1922年4月1日同大学の哲学正教授となった⁴⁴⁾。その後1928年ボン大学からの招聘があったがもちろんそれも断っている⁴⁵⁾。

それは当時最も注目されていた精神医学者、精神科医ヤスパースの前代未聞の哲学への転向であった。それ故に哲学教授としては当時のヤスパースには当初多大な無理があった。彼は我々が知る20世紀を代表する実存哲学者ヤスパースのイメージからすれば想像だにつかない、未熟な新米哲学者である。ヤスパース自身振り返って次のように言う。「1922年4月1日私がハイデルベルク大学の哲学正教授に就任したときは、実際に私は、自分自身の物さしで測ってみても未熟でありました」と⁴⁶⁾。またさらには、「当時の目標といえば、哲学とは名ばかりで、実際は心理学として存在した哲学講座で、心理学を説くことなのでした」⁴⁷⁾とも言っている。しかし彼はその一方では次のように言う。哲学正教授として「今や私は、新たな、より徹底したやり方で、哲学の研究に取り組み始めました。私がそれまでに定めた目標のことごとくをふり棄てて、私はあえて哲学を生涯の職に定めたのであります」⁴⁸⁾と。そしてヤスパースは、

「……いった。マイヤー氏は、『君、そんなことをする必要は全くありません。もちろん君はドリーシュの後任になるんですから』といった。こうして私は自分の目的を達したし、リッケルトは不承不承ではあったが譲歩した。私はこうして、予算の裏づけのある哲学員外教授になった。それが1921年のことであったが、1922年には、二度の招聘を、最初はグライフスヴァルト大学への、次にはキール大学への招聘をうけた。それに対してハイデルベルク大学では、私をどうしたらよいかが考慮された。……結果的には、私はハイデルベルク大学の哲学の私的正教授となり、西南ドイツ学派の講壇哲学の学説全体が片づけられることになった」(SW, S. 27. 邦訳29-30ページ)と言う。

43) PA, S. 39. 邦訳55ページ。

44) J, S. 37. 邦訳43ページ。

45) PA, S. 10. 邦訳7ページ。

46) Ebenda, S. 40. 邦訳57ページ。

47) Ebenda, S. 30. 邦訳41ページ。

48) Ebenda, S. 40. 邦訳57ページ。

精神医学を「やむをえず諦めねばならなかったがために、一時は非常に苦しかったこの運命の巡り合わせも、実際には、私の能力を発揮しうる別世界を開いてくれた幸運を意味するものでした」⁴⁹⁾ と言うのである。ヤスパースは、最初はやむをえず精神医学を諦めねばならぬ苦しい運命を噛み締めながらも哲学へと転じ、最初は未熟でお粗末な状態にある哲学正教授を自覚しつつもそれに専念、やがては自らの哲学を開花させていく。ヤスパース自身、精神医学、心理学の分野で優れた業績をすでに成し遂げていた上に、さらにまた選び取らざるを得なかった哲学においても同様に独創的な業績を上げようとは思わなかったであろう。しかしヤスパースの全業績を我々が今日改めて振り返るならば、まさに哲学研究こそがヤスパースにとってそれまでの精神医学上の成果を投げ出してもしなすべき天職であったかに見える。まさに「哲学部を最終的に選び取ったのは、実は私の運命として定められた道への導きであった」⁵⁰⁾ とヤスパースが言う通りである。叶わなかった精神医学、心理学の道からやむをえず転じた道こそが、結果的には彼自身思いもよらないほど実り多き本格的な哲学構築への道であった。彼は、ヴェーバー流の現代の精神的危機への危惧から『現代の精神的状況』(*Die geistige Situation der Zeit*, 1931)を著すのみならず、この時期に哲学上の主著『哲学』3巻(*Philosophie*, 1932)を著し、「ヤスパース哲学」を確立させたのである。それはまるで前期ヤスパースにおいてすでにその構想を練っていたかのようにであった。

V 後期ヤスパース (1933年～1969年)

——哲学的「人間存在探求」完成時代——

後期ヤスパースにおいてヤスパース哲学は、さらに「包括者存在論 (Periechontologie)」によって発展し完成されていく。自らの哲学をまとめた『理性と実存』(*Vernunft und Existenz*, 1935)、哲学上の第二の主著と言える大著

49) Ebenda, S. 30-31. 邦訳41ページ。

50) Ebenda, S. 30. 邦訳40-41ページ。

『真理について』(Von der Wahrheit, 1947), 『啓示に面しての哲学的信仰』(Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, 1962) など, その活動は1969年他界する間際まで続いた。ここに前期からのヤスパースの思索は哲学として実を結んだと言えるのではないか。その間時代は容赦なくヤスパースの運命を翻弄したにもかかわらずである。つまり彼は, 1937年国家社会主義によりハイデルベルク大学の教職を剥奪され, 1945年アメリカの占領軍当局の同意下に復権, 1947年バーゼル大学の招聘に応じハイデルベルクを後にしてバーゼルに移り住むこととなったのである⁵¹⁾。

本稿のねらい, 前期からのつながり, 精神医学研究という観点から後期を考察するならば, 他にも興味深いことが見て取れる。それは精神医学上の名著『精神病理学原論』を, ヤスパースは哲学者へと転身したその後の中期のみならず, 後期においてもさらに継続的に積極的に書き加え, 改版し続けたということである。しかも初版からその最終版第九版までに, その内容は1ページ目から書き改められ, ページ数も約3倍にまで膨れ上がっている。そのため初版と最終版とでは, もはや全く違う書の体をなす。したがってこの書の和訳本も, 初版と第5版によるものが存在するが, その日本語タイトルは初版では『精神病理学原論』であるが, 第5版では上中下三巻本となって『精神病理学総論』と全く別の本の体裁を呈している。特に1946年の第四版において, ヤスパースはページ数が2倍に達するほどの全面的な改訂をなした。しかもその翌年1947年にヤスパースは, 哲学研究上の第二の名著とも言える大著『真理について』を著している。いずれも大著であることから第二次大戦後一年たらずで書き上げたと言うよりは, 第二次大戦中より精神医学研究並びに哲学研究を共に継続し, 戦後この二つの名著にそれらを見事に結実させたと見るべきであろう。

このヤスパースの前期, 中期, 後期という長きにわたる『精神病理学原論』への改訂から, ヤスパースの精神医学研究への思い入れが如何に深いものであったかが理解されよう。精神医学への関心は, 哲学へとその専門を移した後

51) Ebenda, S. 10. 邦訳7ページ。

も驚くことに実は変わることなく続けられていたのである⁵²⁾。ヤスパースは、哲学者へと転身した後も精神医学を哲学とともに生涯をかけて研究し続け、死ぬまで精神医学者の立場を貫いたのである。したがってこの意味でヤスパースは、精神医学者から哲学者へと完全に転身したとは言えず、一生涯、精神医学者であるとともに哲学者、つまりは、「精神医学者兼哲学者」であったと言える。しかしこれまで考察してきたように、ヤスパースはその前期において『世界観の心理学』を著しそこにある哲学的要素を高く評価されるとともに、哲学者への転身後の中期においてはすでに哲学的構想を練っていたかのように優れた著作を次々と書き上げていった。そのことを考慮するならば、さらに一步進めて前期を中心になされた精神医学研究とそれ以降の中期、後期を中心になされた哲学的研究とは、それらが無縁に並行してなされたのではなく、互いに密接につながり影響や示唆を与えあいながら独創的な研究を成し遂げていったと推測される。つまりそのような研究スタイルを初めから独自にとっていたが故に、彼は精神医学から哲学へと展開してゆかざるをえなかったと仮定できる。しかしなぜ彼は、初めからそのような研究スタイルをとる必要があったのかなどまだまだ不明確である。したがってその仮定の真偽については次稿の課題である。

52) 「……年をへるにつれ、哲学が目標となったのです。自分の若いときの仕事に、私はあくまで誠実にとどまりました。私は決して、『精神病理学』に無関心にはなりませんでした」(Ebenda, S. 31. 邦訳41ページ) と。